

主 論 文 要 旨

No.1

報告番号	甲 乙 第	号	氏 名	クレシ 好美
主 論 文 題 目：				
日本に暮らすムスリム第二世代 ——「生きられたイスラーム」の視点から——				
(内容の要旨)				
本研究では、日本に暮らすムスリム第二世代が、外国ルーツと宗教的背景を持つことによる重層的な周縁化を経験しつつ、〈ムスリムであること〉にどう向き合おうとするのかを考察する。 先行研究が、モスクやイスラーム団体などの組織に紐づく超可視的なムスリムを代表化してきたのに対し、ヨーロッパのムスリム研究の新たな枠組みである「生きられたイスラーム (lived Islam)」や「組織に属さないムスリム (non-organized Muslims)」の概念が、これまで描かれてきたムスリム像の解像度を上げつつある。本研究は、これを日本のムスリム研究に応用することで、組織に紐づいていない場合が多い第二世代の多様な実態を明らかにする。第二世代 75 人への「二人称的かかわり」による質的調査と、103 人分の量的調査および 6 年分の参与観察によって得られた結果を、「生きられたイスラーム」の視点から分析した。 第二世代の語りからみてきたのは、家庭で行われる宗教継承に負担を感じながら、親の愛情を求めて無理する者が少なくないこと、そして親の目に良きムスリムとして映る子のなかには、実は大きな葛藤に懊悩する者がいることである。一方、学校生活における経験として、周縁化の様子とそれゆえに抱く周囲への同化願望の切実さ、さらにはそれがイスラームの名のもとに課される義務や禁忌といった実践によって叶えられないことへの戸惑い、またそこから生じる親世代との距離感もうかがえた。こうした状況において、第二世代の〈自分とは何者か〉への答えは、発達の過程で経験する環境や出会いによって変容する。その際、〈ムスリムであること〉と日本人として生きることの葛藤を乗り越えるために、イスラームの知識の獲得と理解者の存在が重要な役割を果たすことが確認された。 第二世代の生きられた経験の可視化は、始まって日が浅い第二世代研究の空白のいくつかの部分を埋めるものとして、学術的意義がある。また社会的意義として、親世代に子の心情を想像し寄り添うための、手がかりを示し、教育現場にも理解者を増やすきっかけにもなりうる。それによって学校が、第二世代に限らずさまざまな背景をもつ子どもたちにとって居心地よい場として機能し、共生の成功モデルとして社会全体に拡大していくならば、本研究はマイノリティの子どもたちの疎外感の軽減にも貢献するものとなるだろう。 キーワード：日本に暮らすムスリム、ムスリム第二世代、生きられたイスラーム、生きられた経験、二人称的かかわり				